

移民の子どもの人権・ダイバーシティを考える

履修学生：高瀬拓海・入江吏音・榊原慶美・清水フェリペ隆志・初田愛莉・小田原晟・奥田海音

指導担当：社会学部 山本 晃輔

本プログラムの目的

本プログラムの目的は「移民」の子どもの人権とダイバーシティを考えることである。そのために、神戸市長田区のNPO法人定住外国人支援センターにおける移民の子ども学習支援に携わった。

本プログラムの参与団体

NPO法人神戸定住外国人支援センター(KFC)：1997年設立。「ともに生きる」ことができる社会に向けて活動する非営利法人。少数者を守るために、個を大切に（違いを認めた平等）、偏見や差別を取り除き、豊かな社会が実現することを願い活動している。

スケジュール

- ① 事前学習（書籍『外国人の子ども白書』、論文「国際化と都市政策が生み出した神戸市長田区への外国人集積ーグローバリゼーションが引き起こすマイノリティの周辺化」の輪読）
- ② 現地長田区のFW
- ③ 学習支援への参加（期中7回）
- ④ 事後学習（体験を動画とエッセイで語る）
- * 期間中の課題はすべてKFCさんと共有される。

毎回参加後に「日報」を執筆し、概ね二週間に一回、指導教員が動画でコメント。やりとりを重ねる。



KFCでの学習支援

- ① 学校の宿題の補助：長期休暇に学校から出された計算ドリルや漢字ドリル等でわからないことの援助
- ② KFCのワーク：子ども達の学習レベルに合わせた教育（漢字の練習や計算問題）
- ③ 言語学習（文字の読み書き、文章の音読）：在日期间が短い子どもに対して日本語の基本的な学習



現場参与前に私たちが学んだこと

学び1：移民の子どもがどうして日本にくるのか

日本に移民がやってくる理由や事情は多様化している。神戸市長田区に移民が多く生活しているのは、経済的理由が多い。移民の子どもといっても多様化しており、日本生まれや渡日学年など違いがある。日本語能力も様々。

学び2：子どもと学校現場の関係

日本の学校が移民の子どもに対応しているわけではない。そもそも移民政策がない。特別なカリキュラムに関しても、自治体や学校が独自に行う状況である。では移民の子どもの人権やダイバーシティはどのように保障されるのか？

学び3：「特別扱いしない」教育の是非（山本先生からの課題）

日本の学校ではできるだけ「平等」な教育を追求する側面がある。「特別扱いしない」ことが基本となっている。その結果、移民の子どもであっても、日本人と同じ宿題をおこなわなくてはならない……ということになる。現在、日本全国で、こうした教育の是非が問われている。

外国人の子どもには「特別扱いする」教育が必要なのではないか？

私たちの向き合い方

多様性の重要性、ダイバーシティの必要生を考える際に、これまでの経験を活かして外国人として生活してきたからこそわかる視点で考えることができる。そして、同じ外国人として多くの外国人を助けたい

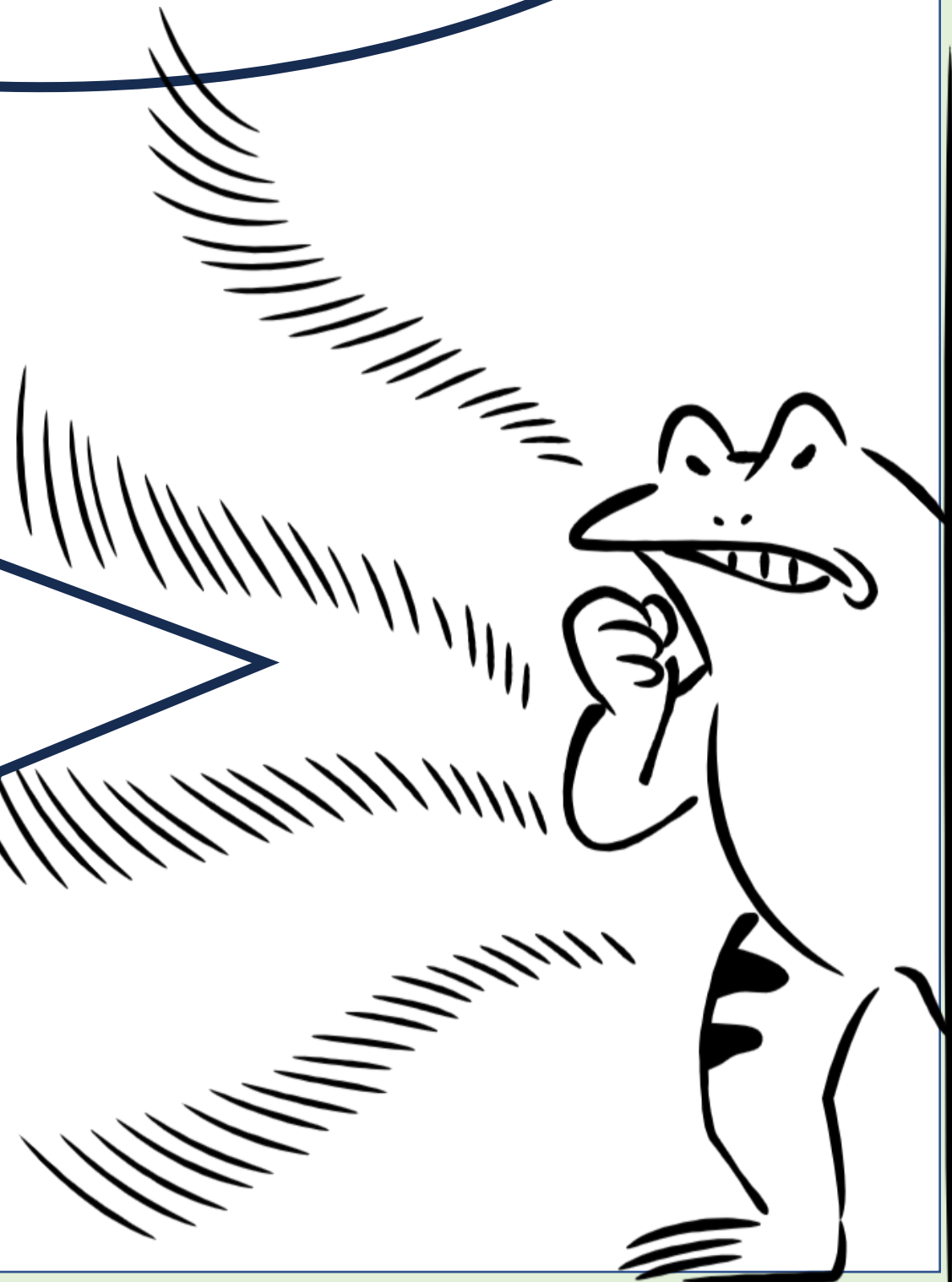


私がこのプログラムを履修した理由は、「その人らしく開放的に暮らせる社会」の実現をしていくためである。この目標を達成するためには、安心して過ごせる居場所づくりが難しい子どもたちを中心とした支援が必要だと考えています。



志は良い！けれど、同じ外国人といっても君は大学に進学できた側・・・はたして「わかる」かな

支援が安心できる場所に本当になっているか。安心できる居場所が学校外にある、というだけでいいのか。現場で考えてもらおうじゃないか。



昨年度の先輩と同じく…？

教えようとしてしまう私たち

昨年度のGS神戸チームと同じように、教えようと頑張ってしまう。
「北海道」という言葉がピンとこない子ども（北：きた）

私たちのコミュニケーション

「椅子に座らせる」「静かに先生の話聞く」
日本人の子どものようにできることを良しとする

移民の子ども「個性」が消えている

外国の文化や振る舞いがあまり見られない。日本人のようだね、と
いうことを肯定的に捉えてしまう。
移民の子ども「個性」っていったいなんだろうか…

「支援」を改めて考える

学習支援の現場は支援的か？

学校現場のように、宿題や課題が優先される。雰囲気は「塾」。私たちも
宿題や課題を教え達成感を感じていた。→ 支援の現場でも学校教育
的な圧力がある → 子どもは日本語を学び宿題をこなさなければなら
ない → そのようにならざるを得ない状況がある
★ 支援者は工夫をおこなっていることも知った

特別扱いは「えこひいき」か？

最終課題に向けた取り組みのなかで、私たちは「特別扱いする教
育」を考えた。そして、ほぼ全員が「特別扱いする教育」はえこひいき
やイジメにつながると考えた（山本先生は全く納得していなかった）。
私たちは「移民の子どもたち」のことを出発点として位置づける前
に、「自分たちの学校経験」を出発点に考えてしまっているのではな
いか。移民の子どもたちがその「個性」を発揮するためには、それを
認める教育が必要なのではないか。
でもそれが難しい…。

日本育ちの外国人大学生として講演を求められる：学びが大きい経験だった…

じこしょうかい

名前：しみず ふえりペ りゅうじ
国：ブラジル（ポルトガル語）
日本生まれ日本育ち
職業：大学2年生



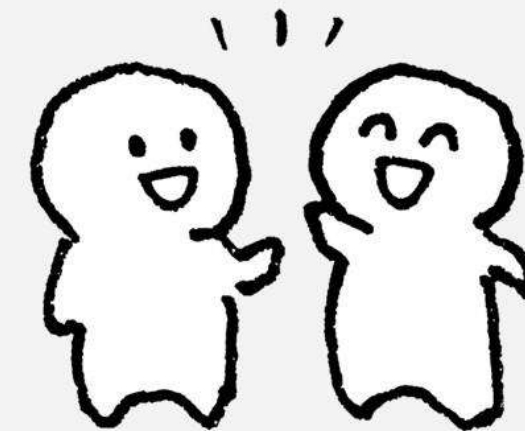
日本でしんどかったこと

- ・日本語がわからない
- ・自分の言いたいことが言えない
- ・先生から特別扱いされすぎる
- ・勉強ができない

2つの夢

外国人と日本をつなぐ人？先生？

中学校の英語の先生



「わからない」「難しい」に気がついた

同じ外国人だから「わかる」と思っていた（清水）

同じ外国ルーツだから「わかる」と思っていた。自分は偏見がないとさ
え思っていた。中国人だから漢字はわかるはずと考えていたが、子ども
たちは漢字に苦戦していた。「漢字がわからないんだ」という気持ちを抱いたが、
考えてみれば、私は日本の漢字と中国の漢字が違うことさえ知らなかった。
「わかっていない」ことに気がついた。



指導と支援には違いがある（初田）

自分のなかで勉強を「支援」という気持ちと、ちゃんと教えるという
「指導」という気持ちがあることに気がついた。どちらも必要だけれど、支
援は学校のなかでできているのだろうか。「居場所」はあるのだろうか。支
援の現場では子どもたちは笑顔だった。その笑顔を見たとき、では学校で
はどうなっているのだろうか。



自分は良かった…でいいのか（小田原）

自分も外国にルーツがある。子どもたちを見ると何の問題がないようにも
見えたと、頑張っていると思った。けれど、自分を振り返ったとき、いじめ
やしんどいことが思い起こされた。そうした様子を見せないということだ
ろうか。学校現場が変わった、ということだろうか。



就学前であっても難しい（入江）

就学前の子どもたちに関わることになった。学校に入学する前から日本語
や日本で生活するうえで学ばなければならないことが多いということを知
った。日本人の子どもなら当たり前…と思っていたけれど、日本人の子
どもたちだって苦手なこともあるかもしれない。



出会うことの大切さ（奥田）

学習支援をするに、私自身が不安を感じていることに気がついた。本
当は子どもたちのほうが何倍も不安なのに。実際に出会うことで、そうし
た不安は溶けていった。
けれど…普段の学校現場で子どもたちは不安なく過ごせているだろうか。
いろんな大人に出会っているだろうか。



寄り添う教育ってなんだ（榊原）

学びのペースはそれぞれ。支援の現場では、そうした当たり前に気がつい
た。では、子どもたちが学校現場でどのような状況にあるのだろうか。ひ
とりひとりの学びに寄り添うことができる教育ってなんだろう。いまはそ
の答えがわからない。難しい、できないという思いが先行してしまう。けれ
どこれを考え続けることが重要なのでは…



言葉ができなければ馴染めない、とは（高瀬）

スクールサポーターとして公立小学校にボランティアとして行ったことを
思い出した。クラスに外国人の子どもがいた。しかしその子はクラスの他
の子ども達と馴染めておらず、担任の先生に聞いてみると、やはり言葉が原
因であった。けれど、言葉ができないことで馴染めないというので良いの
だろうか。



関西の教育現場では「であい」と
「ちがい」を大切にしてきた。
「であい」から私たちは変わって
いく。そして「ちがい」はなくす
ものではなく、皆で大切にしてい
くもの。「わからない」ことに気
がつくことは「経験」しなければ
わからないことだ。

